

身体を鞭打たれるときは、決まって一つの音がする。

風を打つひゅあんといつ音と、皮膚に当たるピシリといづ甲高い音。それと波線状に残る鋭い痛み。攻撃はいつも不意打ちだった。

「いてっ！」

とぼくは背を仰け反らせる。実際、はじめてやられたときはかなり痛かった。背中に赤い筋が浮かんだし、しばらくなびき縦じんじんと熱を持つて傷んだ。そうやって恋人の椎名がぼくを鞭打ちはじめたのは、ぼくが死んだあとのことだ。

ぼくが死んでしまったのは、一月下旬のまだ肌寒い日曜日のことだった。死亡推定時刻は、夜中から朝方にかけて。椎名がおやすみを言い、ぼくもおやすみを返し、そこからおはようの間までのこと。

ぼくの遺体の第一発見者は……ふれかるのはもうよりひつ。一緒に寝てこむぼくが死んで

しまっていることに気付いたのは椎名だ。いつもどおり二人ともパジャマ姿で、毛布にもぐりこんでいた。

「ねえねえ、起きてよ

安眠していたぼくの肩に手をやり、彼女はゆさゆさ唇をふりて起こした。

「……なんだよ」

「海『うみ』くんの心臓、動いてないみたいなんだけど」

「あれ？」

田やこの浮いたまぶたをこすりながら、ぼくは椎名を見上げた。

「ほんとっ！」

ベッドサイドの目覚まし時計を確認し、あぐびを一つする。

「氣のせいじゃないの？」

椎名はぼくの左胸に耳を当て、首を捻っている。ぼくもパジャマの裾から自分の左胸に

手をあてがつた。椎名がじっとぼくの顔を見ている。

目を閉じてしばらく集中していたが、確かに鼓動は感じられなかった。

「参ったな」

「心臓が止まっちゃうのって、よくあることだっけ?」

「よくわからないけど、あまりない気がする」

「心臓マッサージとか、した方がいい?」

「じゃあ、ちょっと頼む。 ぐえ」

「二人とも事態の緊急性がわからないので、どうにも間の抜けたやつとりになってしまつ。」

「救急車呼ばうか?」

「いいよ。歩いていく

ぼくはベッドから起きだし服を着替えた。シャツを脱いだついでにまた胸に手を当ててみたが、やはり鼓動は聞こえない。

近所の病院に電話をかけた。心臓が止まっているのですがどうしたらいいでしょう、と訊くと、受付の女性は落ち着いた声で、それではお待ちしております、と返した。よくあることなのかもしれない。

「ちょっと行ってくるよ」

「一緒行かなくていい?」

「そんなに大袈裟なことじやなさそうだから」

部屋を出てアパートの階段を下りると、向かい家の庭にしゃもじの姿があった。ドッグフードの入ったプラスチックボックスの前に、お椀型の青いエサ入れを置いて、お座りをしている。ぼくが軽く手をあわせて拌んでも、知らんぷりでボックスを見つめていた。徒歩五分の小さな病院には、時間潰しに来ている老人ばかりだ。受付で待っている間も、鼓動がないかどうか、何度も胸に手を当てて確かめた。

診察室に入ると、心臓が止まっちゃったんですねって? と初老の医師が笑って出迎えた。つられて、そなんですね、とぼくもつい笑いを返してしまつた。

医師はぼくの胸に聴診器を当て、耳を閉じてしばらく動かなかつた。イヤホンで音楽でも聞いているよつて、ふんふん首を揺らす。なるほどと一つ頷いた。

「心音、聞こえますか」

「第九が聞こえますね」

「ぼくは首をひねつた。」第九?

「ベートーベン」

ぼくは自分の胸を見下ろした。

「冗談ですよ、と医師が肩を竦めた。いつものことなんか、脇に立つた看護師はびくつと

も反応しない。

老人との世間話ばかりで、少しずれているのかもしれない。きちんと診察をしてほしい。医師はもう一度聴診器をぼくの胸に当てた。口を開じて耳を澄ませていたが、しばらくして首を振った。

「確かに聞こえませんね」

「やっぱり、止まりますよね」

「心電図をとつてみましょうか」

上着を脱いで、診察台の上に横たわった。胸を中心に、ぺたぺたとシールのようなものを貼りつけられる。

医師が何かを操作すると、脇に置かれた小箱がピー、ト甲高い電子音を発した。医師は小箱の画面を指した。

「心臓が動いていると、こここの線が波を打つんですよ

「打っていませんよね」

「ベタ屈ですね」

船釣りでもしてこよくな調子でさう言つと、医師は横たわったぼくを見下ろし、合掌

した。脇に控えていた看護師も倅つた。  
「ご臨終です」

確かにぼくは、人生の最期なんて呆氣ないものなのだろうと思つてはいた。どれくらい前から思つていたかといえば、たぶん小学生くらいの頃からだつたと思つ。でも実際に体験してみると、輪をかけて呆氣なかつた。

ぼく、死んじやつたのか。

自分の胸を見下ろした。

椎名を連れてこなくて良かつたかもしれない。飼っていたハムスターが病気に罹つて死んだときも、ショックで丸一日何も食べられなくなつてしまつた彼女のことだ。ぼくが死んでしまつたと知つたら、一日ともう一食くらい、何も食べられなくなるかもしれない。

医師は机の引き出しから葬儀屋の名刺を取り出し、ぼくに渡した。あまり良くない提携だなといつつ、名刺を財布の中に仕舞つた。ご家族の方に説明するので、また来るようになるとおっしゃつて話そつ。そう思いながら病室を出た。

お大事にどうぞ、とは言われなかつた。

確かに納得はできるけれども、もう少し気遣いがあつてもいいと思つ。

\*

「そこは、もう少し抵抗すべきだつたんじゃない?」

昼食時、お好み焼き屋に入つて鉄板を繰りながら、言葉を選び選びぼくが死んでしまつたことを告げると、椎名はさう言つて眉根を寄せた。

「抵抗?」

「そういうときは、まだ俺、生きるじゃないか! って、お医者さんに食つてかかるべきだと思うのよね、私は」

椎名はテーブルの上に肘をついて、生地をひっくり返すぼくの手先を見ている。椎名が焼くとお好み焼きは空を飛びるので、これはぼくの役目だ。

「そんな馬鹿な、って返すのが普通なんじゃないかなあ」椎名はじと皿で皿つ。「海くん、どうしてすぐに受け入れちゃつてるの」

「いや、だつてさ」ぼくは抗弁する。「いきなり死んでるつて言われたんだぜ」

「いや、だつてさ」ぼくは抗弁する。「いきなり死んでるつて言われたんだぜ」

「いきなりだからこそ、抵抗しなきゃじやない」

「動かない心電図まで見たんだぜ」

「なんだかなあ。それでももうちょっと取り乱したりするのが、人としてのマナーだと思つけど。いつもながらマイペースすぎる」

椎名は吐息をつく。

「そんなだから、恋愛感情もわからないんだ」

そう言つてしまつと、ぼくはぐうの音も出ない。

ぼくには基本的に欲がない。食欲と睡眠欲くらいはあるのだが、性欲はからきし欠けている。恋愛感情もない。だから一緒に住んでいる椎名との仲を表す関係語も、恋人、といふよつ同居人、といふ語彙の方がしつくつくる。椎名はそのことを不満に思つてゐるらしい。

中学に入つてすぐの頃のことだ。クラスメイト達の話題の中心が、漫画やゲームの話から、急速に恋愛話や猥談にシフトしていった。ぼくは彼らのなんだかよくわからない熱気を見ながら、無理して伸びをしなくとも、そのうち自然にわかるようになるだらうになつあと思つばかりだった。それから十年の歳月が流れた。未だに自然にわかるようにはなつ

ていない。

人に言つて、信じてもらつた経験はほとんどない。ぼくが打ち明けたときの周囲の反応は以下の数種類だ。ぼくが嘘をついていと考へる人（冗談と受け取る人もいるし、ぼくがそうした自己演出が好きな奴なのだと考へる人もいる）。病院を勧めてくれる人（機能的な部分に着目する人と、精神的な部分に着目する人に分かれる）。女じゃなければ男好きかと判断する人（何か言い寄られた経験があるのでないかと推察する）。理由の追及に燃える人は、トラウマというキーワードが大好きなので、こちらもサービス精神として、ありもしない虐待話とかでっちあげたくなる。

そして、まだ本当に好きな人に出逢えていないだけだ、と諭す人。彼らはぼくを励ます。必ずいつかわかるときがくるから♪

そう言われてしまふと、自分が何か酷く大きな忘れ物をしている気がして、ぼくはがっかりしてしまう。

ないこの証明はとても難しい。ないことを証明するには、あることが永遠にないことを見、ずっと観続けなければならない。いつかわかるときがくる　いつか、いつか、いつか　ぼくはいつも自分の人生を保留しているような気分になる。だからぼくは、自分の

輪郭を形作ることがとても苦手だ。

だから、死んでしまったのかもしれない。

昼食を食べ終えると、一駅離れたデパートへショッピングに出掛けた。病院、来週予約したぞとぼくが言つと、来週は遊園地に行きたかったのに、と椎名がぼやいた。ぼくの死のことを、あまり聞きたくないのかもしれない。

ぼくとしては、これから自分がどうなつてしまふのか、気になつてゐる。瀕死の状態ならばともかく、既に死んでしまつてゐるわけなのだし、今さらじたばたしても始まらないとは思う。それでもやはり、不安はある。

デパートを一人でぶらついていると、椎名は何か思つたいた様子で、おもちゃ売り場へ足を向けた。何を買うのかと思いながらついていくが、きょろきょろと見回しながら素通りしてしまつ。今度はスポーツ用品売り場に入つていつた。やはり見当たらぬようで、さつさと行つてしまふ。ぼくは濡いでいたエアロバイクを下り、椎名の後を追つた。

「何探してるんだ？」

「ちょっとね」

椎名はにやりと笑う。教えたいような、秘密にしたいような、そんな迷う自分の気持ち

さえ楽しんだ、複雑な悪戯笑いだ。

「ヒントは？」

「海くん、甘いね。人生、常にヒントを貰えるものとでも思つてゐる？」

「答えを言いたくなくてもヒントを言いたい人は、結構多いと思つてる」

「海くん用に」

田舎でのものは、文具用品売り場にあつた。レジの脇の籠の中にて、剥き出しの状態で、様々な色のものが詰め込まれている。半透明のプラスチックの握りが一本に、それを繋ぐビニールロープ。

縄跳びだ。

椎名は籠の中をじしゃーそと探ると、ブルーの一本を手に取つた。

引き籠もつて死後硬直が進んだりしないよう、ぼくに運動でもせむつもりなのだらう。ぼくとしては、今さら健康的な生活に挑むのは、ナンセンスだと思つけれど。どうして不健康なわけだから。

デパートから出ると、駅へ向かつた。交差点で信号待ちをしてくるあいだ、これからのことを考えていた。

まず死亡届を出す必要があるだらう。生命保険には入つていただらうか。通夜と葬儀の準備もしなければならない。いつ入居するかは別として、墓も必要になつてくる。

頭の中でチェックリストを作つて考え込んでくると、背中でじしゃーそと音がした。

「しい。アパートのことだけど

「首を振り向けたとき、ひゅんっ、と音がした。

風切音。

同時に、ピシッヒ甲高い音が弾けた。背中に鋭い痛みが走つた。

「いてつ……」

思わず飛び上がりて背中を抑えた。道端に飛び出しそうになり、通り過ぎた車が驚いてホーンを鳴らす。

反射的に振り返ると、椎名がこちらをじっと見ていた。

右手に縄跳びの取つ手を一本まとめて握り締め、ちょっと驚いたように田を見張つている。

「何すんだよ」

椎名は吐息をついた。「……ああ、びっくりした

どう考へても、びっくりする権利があるのはぼくの方だけだと思ひのだが。

「痛かったの？」

「あたりまえだろ」

「死んじゃつたら、もつ痛くないのかなって思つて。つい

つい、じゃないだろう。好奇心で加虐行為に及ぶのはやめてほしいものだ。

椎名はすまなさそうな顔をして、シャツの上からぼくの背をさすつた。

犬の頭でも撫でるようにさすりながら、何か重要な学説でも発見したよつて呟いた。

「そうか。海くんでも痛いんだね」

嫌な予感がした。

それからだ。彼女がぼくを鞭打つことを、趣味にするよつになつたのは。

2

ひゅおん。

風切音がするとぼくは反射的に首を竦める。気が休まらない。

ピシッと自分の身体が打たれる音と同時に痛みが走る。

「つてえ！…

飛び上がって背中を押さええる。押さえながら後ろを振り向く。

振り向くと、椎名はえへへと何故だか世にも嬉しそうな笑顔を浮かべている。それで、怒りひどしていたぼくは毒氣を抜かれてしまつ。

椎名は自分で打つておきながら、妙に愛おしそうにぼくの背中の痕をさするので、それでまたなんとなく怒れない。少しでも隙をみせるといつだ。自分の死のひとでこっぽいいっぱいなのに、困つてしまつた。

椎名のことが、ぼくにはいつもよくわからない。

知り合つたのは一年前、ネットゲームの中でだ。その頃、彼女はリアルで言葉を喋るところができなくなつていた。おばあちゃんが亡くなつて半年した頃、発作のよつて、急に言葉を発せなくなるようになつたらし。

【言葉自体は頭にあるんだけど、なんか口から出でてくれないんだよね。文字を打つのはなんともないんだけど】

ゲームの中で、椎名はぼくにそつ打ち明けた。彼女のキャラは魔法使いで、炎の魔法で

敵を打ち倒しながらそんなことを言ひ。

## 【ふうん】

【やつぱり、おばあちゃんのことをまだ忘れてるのかな。カウンセリングの先生はそう言つてる】

椎名はおばあちゃん子で、小さい頃からずいぶんと可愛がつてもらつていたらしい。もちろん椎名もなついていた。

物心ついたときから一緒にいたおばあちゃんの死。通夜や葬儀で遺影の中の笑顔を見て、もう一つ死んでしまったといつことがピンとこなつたといつ。

【確かにショックだったし、今でも思い出すと悲しいけど、引きずつてゐつもりはないんだけどなあ】

椎名のキャラは汗マークのフキダシを発して困っていた。それでもゲームの中で会つ彼女のキャラは、いつも炎の大魔法で魔物を薙ぎ倒していたし、ときどき話を聞いている限り、徐々に発作も収まつていつたようだ。

その頃、ぼくはぼくで人間関係に嫌気が差してきていた頃だつた。周りとの感覚の違いに耐えられなくなつてきてしまつたのだ。お化け屋敷では怖くなくても怖がつているのが

楽しいのと同じで、みんな、恋愛といつのをフリでやつてゐるのだとずつと思つていた。そうではなく本気らしいことをようやく理解し、試しに何人かと付き合つた。女の子たちは、ぼくがお化け屋敷が怖くない人間だと知るや、一人で悩んで、一人で傷ついて、一人で結論を出し、一人で去つていつた。

だからすっかり椎名が良くなつたあと、オフで会つた彼女に告白されたとき、ぼくはほとんどカウンターパンチで告げたのだ。好きにならないけどそれでもいいのか、と。

何を言つても信じてもらえないことに、いい加減、うんざりきていたから。

椎名は信じた。「じゃあ、あたしが海くんに恋愛感情を伝える伝道師になりましょ」何やら斜め上に意気込んでしまつた。

以来、丸一年以上もぼくに引っ付いて、出来の悪い生徒を諭すようにしてゐる。ぼくは困つてしまつ。飽きたら去つていくものと思つてゐたのに。

椎名のことが、ぼくにはいつもよくわからない。

それまで付き合つた女の子たちは、見えない壁に自分から必死に突進していつて、頭をくらくらさせてくるような子ばかりだった。けれど椎名はぼくが何者かなんて、あまり気にしていないらしく。

「痛がる海くんは新鮮だなあ」

縄跳びを手ににっこり笑う椎名は、たぶんちょっと煮詰まって、変な方向に走りはじめているのかもしれない。

「高杉さんの身体は今、ゆっくりと眠ろうとしているところなんですね」

医師はホワイトボードに手際良く人間の身体の外形を描くと、脳味噌、心臓、胃や腸などの内蔵を書き足した。

椎名はパイプ椅子に座り、行儀良く膝の上に手を乗せて、ホワイトボードを見つめている。

「今は心臓があやすみなさいをしたといいです」

医師はそう言って、心臓から『ZZZ』とこつフキダシを出した。

「これから時間をかけて、身体の残りのいろんな部分も、おやすみなさいをしていきます。肺が眠ります。おやすみなさい。腸も眠ります。おやすみなさい。肝臓も脾臓もみんな眠ります。おやすみなさい。胃もおやすみなさいして、最後に脳もおやすみなさいするんですね」

それでは私もおやすみなさい。医師がそう言ってベッドにまぐらこでしまったのではないかと、ぼくは気が気ではなかつた。

「まだ心臓しか眠っていないなら、心臓マッサージや電気ショックはどうなんですか？あと、心臓を取り替えるとか」

「マッサージや電気ショックは効きませんでした。心臓移植も効果はないですね。身体全体が既に眠りはじめていますから。心臓を付け替えるも、またすぐに眠ってしまいます」

「どうしてそんなにすぐ眠っちゃうの」

椎名が唇を尖らせてぼくを見やつた。

「海くんがねぼすけなのがいけないんだよ」

「そんなこと言われても困るよ」

病院を出ると、太陽の光が目に眩しい。陽の光が気持ちいいところのは、生きているときと同じだった。自分が死んでいるだなんて、どうにも実感が湧かない。生きている実感が湧かないのと同じくらい。実感がないので、葬儀の準備にもなかなか取り掛かれずにする。

椎名がつっこむ。しかし、その後ろを振り向いたとき、背中に痛みが走り、ぼく

はまた「いてっ！」と仰け反った。打ち込まれた部分が熱を持つ。

振り向くと、椎名がこちらを見ていた。手には縄跳び。鞄に入れて、持つてていたらしい。

背中をさすりながら、ぼくはちょっと怒った顔をして椎名を見る。

「しい。昨日、もうしないって、言つてたよな？」

椎名はぼくから田を反らした。繰り返される虐待に、昨夜、いいかげんにしろと注意したのだ。椎名は神妙な様子で謝っていたのだが、わかっていないらしい。きちんと説教をする必要がある。

隣の公園へ連れ出され、椎名をベンチに座らせた。椎名は縄跳びを握りしめた自分の手を見たまま顔を上げない。ぼくは立つたまま彼女を見下ろした。

「なんでおれを鞭打つんだよ？」

椎名は答えない。

「やめひつて何度も言つたよな」

椎名は答えない。

「小さな子供じゃないんだぞ」

完全黙秘。

「しい。こいつちを見ろよ」

「……だつて」

椎名は不満そうにぼくを見上げた。

「海くんがいけないんだよ」

「おれが何をしたの」

「心臓、寝ちゃうから」

「おれの心臓が寝ちゃうのは、おれのせいなのか？」

「誰のせいかと言われば、海くんのせいでしょう？」

誰のせいかと言われば、確かにぼく以外の人に責任の所在があるとも思えないのでも、ぼくは頷いた。

それで説教は終わってしまった。ぼくは口喧嘩が弱い。

説教を終えると、ぼくはベンチに座り、縄跳びを跳ぶ椎名を見やつた。縄の長さが背に合っていないのか、何度も足を引っ掛けている。足が地面に着く音と回る縄がひゅんひゅんと立てる音が、単調なリズムを作る。

「しぃ。わかつておいでほしいんだ」

ぼくは眞面目な声を出した。ひゅひゅん、と繩が大きな音を立てた。一重跳びを一回跳んだところで、椎名は足を引っ掛けた。

「おれは死んだんだぜ」

「でも、喋ってるじゃん」

「心臓が止まってる」

「それだけじゃん」

「生きてるのとは、もつ違つんだ。生き返つたりもしない。そのへん、ちゃんとわかつておいてくれよ。また喋れなくなつたりしたら嫌だろ」

自分はおばあちゃんが死んだことを認めていなかつたのだと思つすつかり喋れるようになつたあと、椎名は自分の口でそう話した。

通夜も葬儀も出たけれど、椎名は泣かなかつた。彼女の心の中の何処かは、それを現実だと受け入れていなかつた。現実と彼女の心の世界の間に生まれた小さな隙間が、彼女から言葉を取り上げた。

同じことを繰り返させたくない。

「別にいいもん。話せなくなつても、海くんはおかしいよ。どうしてそんなに簡単に、死を受け入れちゃうの」

ぼくは吐息をついた。「しぃ よりも大人なんだ

「前はそんな風に言わなかつたよ。きちんとおばあちゃんの話を聞いてくれたのに。自分が死んだときはさつさと店仕舞い。そんなのヘンだよ」

別に、ぼくだって好きで店仕舞いしたいわけじゃない。ただ、現実問題、そうなつてしまつたのだから、仕方ない。

高校のとき、国語の授業の時間、人が人として生きていくために一番大切なものは何か、というアンケートがあつた。ぼくは折り合いと書いて提出した。他の子の回答には、愛と夢と希望があふれていた。先生はぼくの回答を読み上げなかつた。

自分に無いものを持っている人たちを、羨んでいたつて仕方ない。嘆いているより今の自分を認めて進みたい。ぼくはそう思つてゐる。死んだのだから、いまできることをしようと思つ。

でも、ぼくの考えが椎名には歯痒いのだ。それはわかつてゐる。でも、それは椎名が生きてこらから感じられることだ。自分の心臓が止まつていなかつら。

「生き返れるかもしれないじゃん」

「ふすっとした声で、椎名は囁つ。それでぼくはまた、踏ん切りがつかなくなる。

「まだ、わからなじゅん」

\*

しゃもじがエサを食べてこるとこを見たことがない。しゃもじはいつも、空っぽのエサ箱を前に、行儀良くおあずけのポーズをして待っている。飼い主もいないのに、四つ足をぴしりとそろえてエサを待つその姿に、ぼくはなんとなく親近感をもってしまひ。

座ったしゃもじの姿はとてもさまになつていて、ぼくと椎名はしゃもじの前を通るとき、なんとなく併んでしまう。しゃもじはあらうといちいち田に向ければするけれど、おあずけの姿勢を崩さない。ちょっと腹心地悪ついで田が泳ぐのが面白い。

「データ久しぶりだね」

アパートの外階段を下りてくると、椎名はしゃもじを併み、ぼくの腕に両手を絡ませる。ぼくは彼女の右手にぶら下がった鞄の中を指差した。

「それ、置いて」よつか  
「あはは。ばれた?」

忍ばせていた縄跳びを鞄から取り出すと、椎名はぺんと田を出した。

「縄跳び、だめ?  
「跳ぶの?  
「打つの」

「だめ

椎名は、郵便受けの中に縄跳びを放りこむと、残念だなあ、と吐息をついた。彼女は相変わらず、ぼくを鞭打つことをやめない。

椎名が何故そんなことをするのか、よくわからない。死人が痛がるのが珍しいのかもしれないし、怒るぼくの反応が面白いのかもしれない。びっくりさせて心臓を叩き起こすつもりなのかもしないし、単純に嗜虐癖に染まりつつある可能性も、なくはない。

なんにせよ、打たれたら痛がつてやらなくてはと思つ。椎名はぼくがまだ生き返ると信じている。死を受け入れる心の準備ができていない椎名に、ぼくの死をあまり感じさせたくはなかつた。

電車を乗り継ぎ、遊園地へ向かつた。車窓からの景色を見ていたら、つい靈園に田がいつてしまつ。

「これから生き返るんだから、お墓の心配はいらなくなる」

「気づいた椎名が不機嫌そう、ぼくの顔を自分の方へ向かせゐる。

「でも、どうやつて？」

「私考えたんだけじ、寝てるのを起しきのせ、やつぱりショックじゃないかと思ひのよねばいいか、いろいろ考えた末の結論らしく。

「それはもう試したんだよ」

「どんなショック試したの？」

「電気ショック」

「電気ショックなんて、本物のショックって言へないでしょ」

ぼくの常識の中では、電気ショックほど本物のショックもない」と思つたが、椎名は気にしない。

椎名が田指したのは、遊園地の中のジヒットコースターだった。ぐるっと一回転するや

つだ。

嬌声をあげる乗客たちを頭上に見上げながら、椎名は言つ。

「私、ジヒットコースターに乗るとね、心臓が早く打つの。だから海くんの心臓も、起きるかもしれない」

何處まで本気なのかよくわからない。

「絶叫マシーンで人が生き返るなんて話、聞いたことないけど」

「あれ。ない？」

「むしろ聞いたことがあるのは、死んだ話の方だ」

「前例がなければ作ればいいの」

「ちょっと格好いいけど」

ぼくと椎名は都合三度ほどジヒットコースターに乗り込み、ぐるぐると円を描いて回転

した。落卜中の體が浮くような感覚は、生前と変わつていなかつた。これは少し生きているっぽいなあと、急降下しながらぼくはちょっと感慨深い思いを抱いた。横では椎名がバーにしがみついて、身を小さくして硬直してゐる。椎名はジヒットコースターが苦手だ。

「どう？ 起きた？」

ふらふらになつてジーツトコースターから降りた椎名は、ぼくの左胸に顔を押し付けた。しばらく耳を澄ませていたが、やがて、どこまでねぼすけなんだ、と文句を言った。

「次だよ。次」

おどろおどろしく飾り立てられたお化け屋敷を見上げ、椎名は「これはさすがに心臓も打つしかないね」と呟いた。そうかなあ、とぼくは応じた。お化け屋敷は苦手だったけれど、死人ともなると自信がついてしまう。一応、こちちは本場だ。

「じゃあ。むしろお化けを怖がりせてやううよ、海くん」

「趣向がずれてる気がする」

大人二枚のチケットを買つと、意気込み、中へと踏み込んだ。出てきたときには、椎名はぐつたりしていた。椎名はお化け屋敷も苦手だ。もう金輪際、お化け屋敷なんて入らない、と呻いた。途中で一度ほど、お化けの代わりにぼくが脅かしたことには気付いていない。暗闇は便利だ。

缶ジュースを買つてくる間には、回復したようだつた。椎名はベンチに座り込んで、ぶらぶら揺れる自分の脚を見下ろしていた。

「一回の缶を受け取りやま、ぼくの左胸に顔を寄せた。

しばらく耳を澄ませていたが、やがて、やる気あんのか、と文句を言った。ぼくはブルタブを開け、コーヒーに口をつけた。

「ねえ海くん。この子、やる気あんの?」椎名がぼくの左胸をつづく。

「やればできる子だとば、思つんだけど」

「そつこつ子、甘やかしちゃダメだよ」

椎名はひとしきりぼくの左胸に小言を飛ばしていたが、やがて大きく吐息をついて、じつとぼくを見上げた。

「で、海くんはやる気あるわけ?」

笑つて誤魔化した。

「笑つて誤魔化さないの」  
ぱれてこる。

「生き返る気はあるのですかと訊いています。さあどうでしようか。お答えください」

「そりやあ、あるむ」

「ファイナルアンサー?」

「ファイナルアンサー」

「どうせ私の気が済むなら、とか思つてゐるんでしょう？」

「私のことは良くて。海くんは、生き返りたいって思わないの？」

「じつも逃がしてもらえないらしい。椎名の表情が真面目だ。

答へに窮した。自分でもよくわからない。自分の胸の裡を見回してみても、どうしても生き返りたいという気持ちは見当たらなかつた。ぼくはただ、椎名や周りの人たちに、出来るだけ笑つていてもらえれば、それでいいと思つ。それすらできないのだったら、ぼくの人生は、本当になんだったのかということになつてしまつ。

でもそれを椎名に言つるのは躊躇われた。椎名はぼくを生き返らせたいし、ぼくに生き返りたいと欲してほしいのだ。だからぼくは嘘をつべ。

「生き返りたいに決まつてゐるだろ」

椎名は唇を結んで眉ひとつ動かさない。彼女にはぼくの嘘などすべてお見通しなのだと思う。私のこと好きになつた？ と訊いて、ぼくの返答を聞いたときと同じ表情をしていふ。ぼくは彼女が可哀想になる。

「まあ、その話は置いといてさ」

「ぼくは話を反らした。

「次、なにか乗ろうぜ」

言つて、背を向けた瞬間、攻撃が来た。

油断していたのがつづくらつた。縄跳びではない。もう少し重く鈍い感触。

背中を抑えて振り向くと、椎名は革のベルトを手にしていた。スカートに巻いていたのを、外して振るつたらしく。さすがに取り上げるわけにもいかない。

「ふんだ」

椎名はベルトを付け直すと、ぼくの手を引き次のアトラクションに向かつた。怒つていふ。話を反らしたのが良くなかったようだ。

ジェットコースターとお化け屋敷を完遂すると、ショック系はなくなつてしまつた。仕方ないので、メリー「ゴーランド」でぐるぐる回つたり、「ヒーヒーカップ」でぐるぐる回つたりした。椎名はむつつと押し黙つたまま、物凄い勢いで「ヒーヒーカップ」を回し、係員に注意された。

「意地でも寝てる気だな」

帰りの電車の中、ぼくの左胸に耳を当てながら、椎名は世にも不機嫌そうに鼻を鳴らし

た。

「絶対起いにしてやる」

しばらべばくの左胸に耳を当てていたが、やがて寝息をたてはじめた。疲れたのだろう。あまり根を詰めて、体調を崩したりしなければいいのだけれど。死んでいる立場で言つのもなんだが。

アパートへ帰りつき、一人でぐっすりと眠つた。

こつも寝る前にはおやすみなさいを言つっていた彼女だが、その口から言わなくなつた。

\*

人の死にまつわる手続きは様々だ。医師に貰つた名刺の葬祭業者に連絡をとり、今後の段取りを相談した。

(またそんなことして！ もっと真面目に生き返ること考えてよー。)

ぼくが葬儀の準備をしてみると、椎名は怒る。

(考えてるよ)

(じゃあ、そんなもの書かないでよ)

椎名は葉書を指さして口を尖らせる。告別式の招待状だ。葉書には一葉一葉、あまり湿つぽくならないよう丁寧に葉を選んで、筆ペンで友人たちへのメッセージを書き入れていた。

(お気軽に越しください、じゃないでしょ。生き返るんだから葬儀なんて必要ないのー！)

(それとこれとは話が別だろ)

(別じゃないー！)

椎名はこの頃カリカリしている。振るわれる鞭も、だんだん容赦がなくなってきた。思いつめた様子の椎名に、参つていなかつたけれど、

とはいえばくの方も、あまり余裕がない。死んだ直後はなんとも思わなかつたけれど、

この頃、悩む時間が増えた。意味もなく気分が沈んだりして、若干塞いでいる。

葬儀の手配をしていると、少し気が紛れるのだ。自分がいま自分でやるべき範囲のこと

で、働いている気がして落ち着いた。地に足がついた感じがする。死んでこる立場で言つ

のもなんだが、あまり生き返ることについてばかり考えていると、息が詰まってしまう。

作業を一段落させると部屋を出た。椎名は高名な靈能者の話を聞きに出掛けている。

駅前を行き交う人々は、みな生きている人ばかりなのだろうか。椎名の実家の最寄り

駅へ、路線図をチェックした。椎名のお母さんへ、今後のことを相談しておかなければいけない。

ホームで電車を待つていると、男が田についた。襟元のくたびれたYシャツ。片手に擦り切れた鞄をぶら下げている。白線のぎりぎりに立って、どこか虚ろな瞳で線路の方を眺めている。

飛び込む気だ。直感的にそう思った。

男はどうした田で宙を見つめている。生きているくせに、なんでそんな田をするのだろ。ぼくの方が、まだ生きているっぽい田をしている。幽霊が仲間を招きたくなるのは、こんな気持ちなのかもしれない、と、ふと思つた。

まもなく電車がやってくる、とアナウンスが告げた。男の視線が、近付いてくる車体へ向いた。足がふらふらとホームの端へと動いた。

ぼくは吐息をついた。

「よし」といた方が

背中に声をかけると、男はびくっと震えた。彼の中で、超えそうになっていた針がぎりぎりのところに戻るのを感じた。男が振り返るよりも早く、ぼくはそそくさとその場から

離れた。

ホームの端から田をやると、男はベンチに座り込み滑りこんできた電車を呆と見つめている。

自分にないものを持っている人たちを、羨んでいたってしかたない。

思い出の中にしか存在できないのなら、きっと誰だって精一杯、格好をつけたくなる。

ぼくはそういう想ひ。

椎名のお母さんとひとしきり談笑してから帰宅すると、疲れきった椎名が出迎えた。

「何処行つてたの、海くん。こんな時間まで」

じと目で言うその田の下には隈ができる。手に持つたOA用紙の束には、靈能者のパンフレットと一緒に、西洋蘇生魔術についての記事がプリントされていた。

「じいのお母さんとのこと」

「何じこ」

「一応、今後の相談をさ。じいも一人じゃ大変だろうし。うちのおふくろも、そのうち来るとは言つてたけど、あてにならないしや。いろいろ大変だろ」

「ねえ」ぼくの言葉を聞くと、椎名は大きくため息をついた。「……海くん、生き返る気、がない？」

「そんなことはないよ」

軽く笑いながら、横を通り過ぎる。

予想通り、風切音。ピシリ。

「いてえ！」

背中を押さえて後ろを振り向くと、椎名は真剣な顔でぼくをみつめていた。

「海くんは私にとって楽しい？」

椎名は訊く。それを確認しておかなければ不安でならないみたいに。

「楽しいだ」

ぼくは答える。

本心だ。

ぼくは椎名を大切に思っている。

「死んじやつて悲しくないの？」

椎名は確認する。

「まあ、それほど悪くはないよ」

椎名はしばらく、ぼくの顔をじっと見ていた。

それから、そうかあ、とちゅうと氣が抜けたように笑った。久しぶりの緩んだ顔だった。

「そういうもんなのかな」

「そういうもんだ。しげが思い詰めすぎなんだよ。もうちょっと氣楽にやろうぜ」

椎名には、ぼくのことに関して、心残りを残したくない。ぼくは無念の死を遂げるより、笑つて死んだ方がいい。彼女もぼくとの別れを受け入れやすいだろう。

普通の恋もできないままぼくを慕ってくれた椎名に、心の傷だけ残したくなかった。たぶん、ぼくが取り戻したいのは、命というより、椎名と過ごす穏やかな時間の方なのだ。鞭打たれるとぼくは痛がる。じてっ、と大げさにリアクションをとる。上手く痛がれたかがとても気になる。もう少しだけ、生きているふりをしていたかった。

本当は、段々痛くなってしまったから。

葬儀の準備は着々と進む。煩雑な手続きを着々とこなしている間は、余計なことを考えなくて済む。ついつい集中してしまって、進みが早い。そんなに急いでやることないじやん、と椎名は不満げだ。でもそういうしかない。

ぼくの身体は眠りつつある。そのうち全部眠ってしまう。自分の死後の手続きを、椎名にやらせるのは忍びない。そう思つてやつているのに、椎名は気に入らないらしい。「ご遺族が納得していないなら、無理して進めなくともよろしくんじやないですかね」ぼくらのやり取りを横で聞いていた葬儀屋が、いらっしゃれなくなつたように笑つた。行儀のいい正座をこなし、屈託なく笑うおばさんだ。

「お葬式つていうのはね、気持ちの問題ですから。亡くなつた方が早くお済ませになりました気持ちは、勿論わかりますけどもね。そんなに急ぐこともないと思いますよ」最近の死人の方には多いんですよ、と葬儀屋は言つ。

「私も長いことこんな商売やつていますから、亡くなつた方のことはよくわかるんです。皆さん、人が死んだときはぐずぐずしてるくせに、自分が亡くなるとさつさと葬儀を済ませようとなさるもんだから。遺族の方が可哀想ですよ」

そりそり、と横で椎名が頷いている。そういうものでもないだらうとぼくは思つ。

葬儀をしないと、椎名がぼくが死んだことを割り切れないだろ。ぼくはぼくで、きちんと区切りをつけないと、居心地が悪い。死んだという実感がないまま死んでいると、自分がどうしていいか、自信が持てない。

ぼくがそう言つと、椎名と葬儀屋は顔を見合わせ、男の人は柔軟性が無くて駄目ね、と笑つた。そういう問題じやない。

「海くん、怒つてる?」

納得がいかないまま葬祭場を出た。ぼくが黙つて歩いていると、椎名は後ろから追いつきざま、ぼくの顔を見上げて覗きこんだ。

「……なんで?」

「なにか、怒つてるっぽく見えるから」

「別に怒つてない」

ただ、死人の気持ちなんて、生きてる奴にはわからないんだと思つただけだ。

死んだままこうして生者の世界を歩いている不安なんて、きっとわからないんだ。

「あ、海くんが拗ねてる。拗ねてるっぽい。可愛い」

椎名はぼくの気も知らず、面白そうにきやつきやと笑つ。その笑顔に、何故だか無性に

腹が立つてしまつて、ぼくは椎名の脣に自分の顔を寄せキスした。それがぼくを好きな彼女にとって、特別な意味があることも、ぼくにとっては意味のない行為であることを、彼女が知っていることも承知の上で。

唇を離した。椎名は突つ立つていて、

「行くぞしい」

背を向けると、風が唸つた。

「いてつ！」「

ぼくは背中を抑えて跳び上がる。

振り返ると、椎名は縄跳びを握りしめてぼくを睨んでいた。冷え冷えとした声で言つた。

「今のキスはない」

「…………」めん

「海くんのキスに愛がこもつてない」とへりい百も承知。承知の上で欲しいときもある。でも今は酷い

「悪かつた」

椎名は何も言わずにまた縄跳びを振るう。胸に当たり、ぼくはまたいてつ、と呻いた。本当は、ほとんど痛くない。痛覚は急速に鈍りはじめていた。

こんなことするんじやなかつた。きっと、唇もう冷たかっただろう。

お詫びに馳走することになつた。レストランに入つたが、食欲は湧かなかつた。胃もだいぶ眠つてきているのだ。無理に詰め込むと、消化できなくて、胃の中で腐つてしまふのではないか。腐臭を椎名に嗅がせたくはない。

「海くん、食べないの？」

「あまり腹、減つてないんだ。葬祭場で茶菓子食つたし」

ぼくはぱんぱんと腹を叩く。おっさんみたいだね、と椎名は冷たく言つ。

本当は、生きているふりなどしていてはいけないのだろう。味覚がもう眠りはじめていることも、伝えるべきなのかもしない。でも、言えなかつた。

アイスクリームだけ食べることにした。胃が働いてくれなくても、勝手に溶けてくれるから大丈夫かなと思った。椎名がハンバーグを切り分ける前で、ぼくは器に盛られた冷たい塊にスプーンを差し込む。

「海くん、アイス好きだつたつけ」

「死ぬと味覚も変わるもんでね。冷たいものが好きになるんだ」

ふうん、と椎名は切り身の肉を口に運ぶ。

そういえば、と思い出したよつに咳いた。

「昔ね、手が冷たい人は心が温かいのよ、つて近所のおばさんに言われたんだけどね」「ぼくはアイスクリームを完食する。

うまかった、と手を合わせた。味はあまりしなかった。

「じゃあ一番優しいのつて死体なんですねつて返したら、笑われちゃったの」「椎名は切り分けたハンバーグを噛みしめながら、納得いかないなあ、と咳いた。

一人でベッドに入ると、椎名は縋りつゝよひじまくの胸に頬を寄せる。左胸に耳を当てさせてるのが忍びなくて、位置を交換した。

寝入っていると、衝撃が来る。ぼくは急いで目を開けて、身体をびくんと起こす。こら、しぃ、と怒った声で椎名を見上げると、縄跳びを握りしめた椎名は、ぼくに怒られて、どこか安堵したような顔をする。

怒る気などない。でも怒らなければ、痛くはない。でも痛がらなければ、あとどれだけ

きちんと飛び起きることができるかわからんけれど。

自分が死んでじる」とは悲しくない。でも椎名を悲しませたくない。

でもこんなことを続けていたら、彼女はぼくがいなくなつたあと、また喋れなくなつてしまつんじゃないか。

海くん、と椎名が寝言を言った。

起きてるよ、とぼくは呟く。

\*

身体に残つた痕の治りが遅い。

鏡の前で身体を捻り、背中を見る。赤と紫と青が混じつた痣が刻まれている。椎名の度重なる虐待の痕跡だ。前はすぐにもとの肌色に戻っていたのに、治りが遅い。

がたつ、と洗面所のドアが音を立て、ぼくは慌てて振り向いた。

「ちょっと海くん。なに鍵なんてかけてんの」

扉を開けると、椎名が眉を顰めていた。ぼくは既にシャツを着込んでいた。

「思春期の高校生じやあるまいし。洗面所に立て籠らないでよ」

「自分の肉体美に惚れぼれしてたんだ」

横を通り過ぎると、椎名は背中からぼくのシャツに手をかけ、ぐいと引っ張り上げた。鞭にはいつでも反応できるように警戒していたのだが、これは予想外だった。

ぼくの背中を見た椎名は、しばらく黙つてから、もうと唸つた。

「もう打たない方がいいのかな」

「いや、全然大丈夫だけど」

「むしろ打つって?」

「そんなことは全然ないけど」

朝食を胃に収め、消化促進の胃薬を飲むと、一人で出掛けた。季節はもう春だ。

外に出ると、しゃもじがエサを食べていた。エサ入れに口を突っ込み、固形状のドッグフードをもしゃもしゃと咀嚼している。

「食べてゐる」

「食べるんだ、しゃもじも」

「だまされた」

しゃもじはきっとエサなんて食べず、「永遠におあづけをして待ち続けているのではないか」と思っていたのに。

太陽の光が視界の隅で輝いている。あまり眩しさは感じなかつた。フィルムを通したよう位にどこか薄暗い。虹彩が眠つてきているのかもしれない。

明るくて気持ちいいね、と椎名が言つた。

そうだな、とぼくはあくびを噛みこらした。

「眠いの?」

「んー、眠くなる陽気だからなあ

起きるー、と椎名はぼくを鞭打つ。いてえつ、とぼくは跳ねてみせる。

映画館では、近頃流行りのJF映画を観た。真っ暗な中で座つてみると、次第に眠くなつてしまつ。昔、こうやって椎名と映画館に行つた。あのときも、ぼくは眠くなるのを必死に我慢していたような気がする。

「海くん、眠いの?」

映画館を出ると、椎名が訊いた。

「眠そう」

「映画が面白くなかったからだ」

「えー、せっかく選んだのに」

椎名は唇を尖らせて「ふうふう」と文句を言つ。椎名はぼくの嘘を見透すのが得意だけれど、知つて知らぬふりをするのも得意だ。

とても眠い。

死ぬこと以外に、何が眠くなる理由つてないんだろうか。

「映画館でしょ。美術館でしょ。ホテルで食事をして、成り行きに任せや。海くん、私を襲つてみない？ 生き返るかもよー」

「興味ないよー」

「酷いね。酷い。海くん、眠いの？」

「だって椎名の話が退屈なんだもん」

椎名は無言でぼくの尻を蹴る。つてえ！ とぼくはかりうじて反応して跳ねる。上手くできているか自信はない。痛みも感触も、もうなかつた。

今になつて思ひ。生きているときにぼくはもう少し、彼女にこいつって反応してあげれば良かつた。痛くなくても、感触がなくても、こいつって大袈裟に飛び跳ねてあげれば良かつたのだ。

彼女は死者に鞭打ちたくなるほど、とても寂しかったのだろう。歩いていると、椎名がつっこむ。どうした？ と振り向くと、なんでもないよと笑つて走ってきた。

「ねえ海くん。私のこと好き？」

「だから、しげはざむつてほじいんだよ」

「だから、それは訊いかや駄目なの」

美術館に向かう道をぼくらは歩く。また歩いていると、椎名がつっこむ。

どうした？ と振り向くと、彼女はつむいて地面を見ていた。

その手に縄跳びが握りしめられてることに気が付く、ぼくは自分の失敗を悟つた。

「……痛くないんだね」

椎名が呟いた。

「我慢しただけだよ」ぼくはでまかせを言つ。「おれ痛がる」と、しげが喜ぶばかり……

「海くん、もう痛くないんだね」

縄跳びを握りしめる椎名の手が震えている。溺れてしまつて、必死に縋りついているよ

「痛くな」のこ、痛がつてたんだ

「違う。痛い。痛いぞ、しい」

「私をだましてたんだ。海くんは嘘つきだね！」

ひゅんという風切音に、反射的に庇つた右腕を、ぴしりと繩

いてえ！」

嘔じやん！ 痛くないんじやん！ 海くん もう眼まなこちやちやたんじやん！

「靈れい」

椎名は泣き出しそうに顔を歪める。もうじりこしてこにかわからないうつて縄跳びを振る

۷۰

「政治」の痛

「痛がり方は人それぞれだろ！ そこに指図は受けない！」

痴くないなら痴くないで言えはいいし」ハ  
聞りハ 滅ぐハの言ふことなか

「いい。いい加減にしないとおれも怒るぞ  
いつてえ！」

ぴしつ、ぴしつ、と縄跳びを当てながら、椎名は泣いていた。目から大粒の涙があふれて、ぼろぼろ頬を伝つて落ちた。いてつ、と身体を庇いながら、ぼくはそれだけ見届ける。おばあちゃんが死んだとき泣けなかつた彼女。ぼくが死んでからまだ泣いてなかつた彼女。ようやく泣けた。鞭を振るいながら。

やだよ、海くん」しゃくりあげながら、椎名は繩跳びを振るう。「死んじやだよ！」

「痛くないんだからいいじゃん！」

「そういう問題じゃないだろ！ 痛いって！ いつてえー！」

椎名は泣きながらぼくにむしゃぶりつく。冷たい体温と固くなりはじめた皮膚を彼女に感じさせたくないくて、ぼくは一步後ろに下がったけれど、彼女は小さな子供のようになに縋つた。海くん、海くん、としゃくりあげながら、それでもぴしひとぼくの背中に縄跳びを当てる。ぼくこはもう椎名の身体を感じる皮膚感覚はないし、痛みを感じる痛覚もないけれど、それでも、いてつーと痛がってみせる。泣きじやくる彼女を見ながらぼくははじめて、自分が死んでしまったことを、自分のために少しだけ悲しいと思つた。

椎名はぼくのシャツに涙と鼻水をなすりつけながら縄跳びを振るつ。いてつ、いてつ、とぼくは飛び跳ねる。

きっともう少ししたら、一人ともなんだかもう馬鹿らしくなつて、笑いはじめてしまつだろつ。椎名はぼろぼろ泣きながら、いつもの笑顔に戻れるだろつ。

だからその時のためにもう少しだけ、ぼくは打たれる。

「いつてえええーー！」

視界の隅で、あの人たち向やつてゐるの、と小さな子供がひからを指をした。

見ちゃやいけません、とお母さんが、その手を引いて足早に連れていつた。

4

「本日はお忙しこことこの私の葬儀にお集まつください、どうもありがとうございました。故人を偲ぶエピソードでも披露しようかと思つていたのですが、なんか眠いのでやめておきます。本日まで故にお付き合ひ頂き、誠にありがとうございました」

読経と記念撮影を終え、ぼくが最後の挨拶をすると、参列者たちは拍手して合掌した。ぼくは恥ずかしくなり、早々に棺桶に引っ込んだ。着慣れない白装束が、なんだか照れくさい。

棺桶に収まつてじつとしていると、参列者が花を一本一本、頭の周りに置いていく。田を含ませて笑いかけると、皆もじゃあな、と笑つて手をあげた。

椎名は花と一緒に縄跳びを入れた。天国でも誰かが海くんを鞭打つてくれますように、元にやりと笑んだ。それは勘弁してほしい。それから、ぼくの唇にキスをした。ピィツと誰かの口笛が響いた。

火葬場は混んでいた。ぼくはうとうとしながら順番を待った。熱いですか、と係の人にお訊くと、サウナみたいなものだね、ということだった。入ったこと、あるんだろうか。

順番が来ると、棺ごと火葬炉の中へ入ることになった。最後の別れというところで、皆がぼくの顔をじっと見るので、つい眠ったふりをしてしまった。

椎名にはお見通しだったようだ。ぼくの耳もとに顔を寄せた。そうして毎晩やっていたように、その挨拶をさせやいた。

「おやすみなさい。海くん」

「おやすみ。しい」

暗い炉の中で、火がかかるのを待ちながら、ぼくはうとうと夢を見る。ぼくと椎名で縄跳び競争をしているという、変な夢だ。負けが込んだ椎名は、苛立つてぼくを鞭打ちはじめめる。ぴしつ、ぴしつ、と音がする。

いたいよ、しい。

炉が温かくなつていいくのを感じながら、ぼくは眠りへと落ちていった。